

シュライアマハー『信仰論』「解説」について

水谷 誠

高森昭先生のシュライアマハー研究は長い歴史を持つ。チューリヒのエーベリング教授のもとで学位論文をまとめる作業の中に浮上したシュライアマハーへの関心に始まり、後期のシュライアマハーの神学思想の研究やその背景となる近代ドイツプロテスタント神学史にかかわる多くの論文を公にしてこられた。その間に繰り返し関連国際学会に出席され、またキールやベルリンのシュライアマハー研究所でのインタビューやベルリンの図書館、文書館で実地調査を続けてこられた。そして 1996 年にシュライアマハーゆかりのハレで創設された国際シュライアマハー協会には、アジアからの研究者として初めて評議員 10 名の一人に名を連ねられることになった。邦語論文だけでなく、ドイツ語での日本におけるシュライアマハー研究の報告にならんで、1960～70 年代にシュライアマハー研究の新たな方向づけに決定的に貢献したビルクナー教授への献呈論文集 (Schleiermacher und wissenschaftliche Kultur) への寄稿やシュライアマハーもその創設に参画したベルリン大学の歴史をめぐる論考を『大学史年報』(Jahrbuch der Universitätsgeschichte) に発表されている。

先生の研究の特質は、まずはバランスの取れた簡潔で的を得た研究状況の整理と問題提起にある。本「解説」でもいくつかの箇所で『信仰論』を読むポイントが整理されているところにそれはよく表れている。それらは必ずしも詳細な論及に立ち入るわけ

ではないが、その整理の背景には、単に重要と見なされる研究文献類にとどまらず研究史を通観することなしには、また常に最新の研究文献を渉猟して言わばバージョンアップすることなしには不可能と言える分厚く、幅広い知見の蓄積がある。それはひとりシュライアマハーだけでなく、彼の置かれた近代から 20 世紀にいたるドイツプロテスタント神学思想史にも当てはまる。先生は日本において近代ドイツプロテスタント神学とその歴史を類まれな仕方を知悉された方であった。

私自身は、大学院後期課程に在学中から先生にシュライアマハー研究の手ほどきを受けてきた者の一人であり、関西学院の研究室、またご退任の後はお自宅を訪ね、楽しい語らいの時を持ち、その該博な知識から常に示唆と刺激を受けてきた。

晩年の先生は、『信仰論』第 2 版(『キリスト教信仰』)の邦訳にライフワークとして取り組んでおられた。それはほぼ完成された状態で残されており、それに付されたのがこの「解説」原稿である。日本におけるシュライアマハー研究は徐々に進展してきているが、しかしそれは牛歩のごとくといって差し支えない。この事態の大きな要因は、まずは、テキストの難解さにある。『信仰論』の註釈には古代ラテン教父のみならずギリシア教父についての知識も必要だという話を先生から聞いたことがあるが、そういった教義史に対する素養にとどまらず、時代の思想

潮流や哲学史についての包括的な知識が要求される。正統主義、啓蒙の神学、カント、スピノーザ、倫理思想史等を咀嚼、独創的に整理したシュライアマハーがそこに控えているのである。さらにそれに文体の難解さが加わる。シュライアマハーが句読点を嫌悪したことは有名であるが、利用する用語・概念も一様ではない。テキストの土台となったのは大学での講義であったが、内容を伝えるためにその時々の状況・文脈に応じて臨機応変にさまざまに表現してきたのである。それは当時の聴講者には親切であったが、時を経た現代人にとってはかえって晦渋になってしまうのである。

この「解説」は手稿で残された未定稿であり、邦訳出版の折にはさらに推敲、校正を経た形のものを見ることができたであろう。にもかかわらず、この原稿の内容には長年にわたる先生のシュライアマハー研究の成果が随所に現れている。「リュッケへの回覧書簡」、さらに「神の属性」をめぐるシュライアマハーの理解と整理の仕方、そしてベルリン大学創立にかかわる歴史への言及……。それらは先生独自の研究の蓄積に基づいて作成されているのである。

個人的に深く印象に残っているのは、先生とともにシュライアマハーゆかりの場所を訪ね歩いたことである。その一つ、1990年代半ばに先生とベルリンで落ちあい、ベルリン大学、シュライアマハーのレリーフ、第二次世界大戦終結時に破壊され訪問当時は未整備の何の変哲もない路上駐車場になっていた三位一体教会の跡地、三位一体教会墓地のシュライアマハーの墓前、彼の居住した建物……などをご一緒に

回らせていただいた。帰国した後、奥様の由美子夫人から「あんなところ(教会跡地の駐車場)でヘラヘラとうれしそうにしているのはあなたたちだけよ」とからかわれたことは楽しい思い出のひとつである。

顧問格で入っていただいた「日本シュライアマハー協会」が、先生のご遺志を想起しつつ、このプロテスタント神学の高峰についての研究をさらに進展させて行くきっかけとなることを願ってやまない。

[追補]

Hermann Fischer による TRE ならびにベック社から出た簡潔なシュライアマハー案内が「解説7文献紹介」に掲載されている。これにフィッシャー教授の遺作になったと思われる報告をさらに加えたい。2017年に出た *Schleiermacher Handbuch*, hrsg. von Martin Ohst, Tübingen にもシュライアマハー・ルネッサンスやシュライアマハー研究のセンターとしてのゲッティンゲンなど、1918年から現在にいたる興味深いシュライアマハー研究史の一断面がそこに描写されている。

「解説3執筆の事情」に言及されている「リュッケへの回覧書簡」(*Schleiermachers Sendschreiben über seine Glaubenslehre an Lücke*)であるが、その後ドイツ語原典からの邦訳が詳細な解説を付して刊行されている。

『「キリスト教信仰」の弁証—「信仰論」に関するリュッケ宛ての二通の書簡—』(安酸敏真訳)、知泉書館、2015年。

(同志社大学神学部教授)